

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(26) : アフリカ便り1 : カメルーンにて

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	298
ページ	58-60
発行年	2006-01-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5199

縦横無尽 タテとヨコのファイールドワーク 26

色とかたち

吉本 忍

アフリカ便り① カメルーンにて

今、わたしはアフリカのカメルーンの商都ドゥアラに滞在している。先月号の原稿の締め切りは、一昨日カメルーンに移動する前のナイジェリアに滞在しているときであったが、インターネットの不調のため、先月号もやむなく休載としてしまった。

今回は40日間に、セネガル、マリ、ニジェール、ガーナ、ナイジェリア、カメルーン、中央アフリカ、ケニア、タンザニア、マダガスカルの10カ国を駆け足でまわるといふ、これまでにならぬあわただしい旅をつづけている。渡航先の国々では、いずれもアフリカン・プリント、およびそれらの布で縫製された衣装などの調査と収集、およびアフリカン・プリントやその衣装にかかわる写真とビデオ撮影をおこなっている。こうした活動は、前回296号の連載の冒頭でお知らせした民博(国立民族学博物館)の来秋の特別展「テキスタイル・グローバルゼーション」(仮題)の開催に向けての準備作業である。そして、今回の最終渡航先となるマダガスカルから帰国した1週間後にはヨーロッパに行き、さらにその後には、インドネシア、オーストラリア、カリブ海諸国、インド、中国などを飛びまわる予定である。

そうしたことから今月号の連載からしばらくのあいだは、これまで連載をつづけている「開口具」のシリーズをしばらく中断し、渡航先の各地からの現地便りを連載し、来年民博で開催する展覧会の予報としたいと考えている。

アフリカン・プリントの歴史

一九九三年の秋、わたしは「ジャワ更紗―その多様な伝統の世界―」と「現代のジャワ更紗―ニュー・ファッションへの展開―」という二つの展覧会を企画し、前者は民博の特別展として、また後者は当時民博の向かいにあった国立国際美術館の企画展として開催した。そして、これらの展覧会のあとの一九九六年には、これまでのジャワ更紗の調査研究の集大成として平凡社から「ジャワ更紗」を出版した。わたしとしてはこの出版でジャワ更紗についての調査研究に終止符を打ったつもりで、その後には世界各地でも織機や機織り技術の調査研究をおこなっていた。

しかし、二〇〇〇年にアフリカで、セネガルを皮切りに、トーゴ、コンゴ、カメルーン、ケニアでも織機と機織り技術の調査と織機やアフリカン・テキスタイルの収集、ならびに機織り技術の映像記録をおこなったさいに、一度蓋をしたはずのジャワ更紗の研究を再開せざるをえないという事態に立ち至った。というのは、収集対象としたアフリカン・テキスタイルの大半を占めていた現代のアフリカン・プリントのデザインの多くが、今なお



写真4 店頭に並ぶアフリカン・プリント(セネガル、ダカール/2005年)

KADERDINA HAJEE ESSAK LTD.
SOLE IMPORTER & DISTRIBUTOR
P. O. Box 201, MOHARRASA, MOROCCO

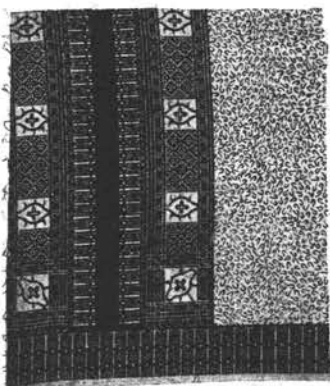


写真1 アフリカン・プリントの見本布1(ケニア、モンバサ:2000年)

KADERDINA HAJEE ESSAK LTD.
SOLE IMPORTER & DISTRIBUTOR
P. O. Box 201, MOHARRASA, MOROCCO

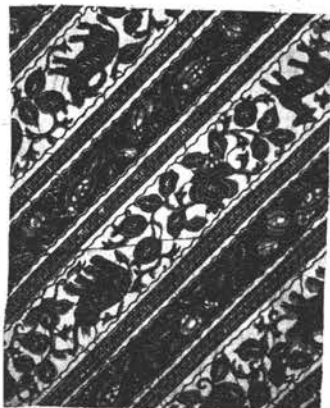


写真2 アフリカン・プリントの見本布2(ケニア、モンバサ:2000年)

KADERDINA HAJEE ESSAK LTD.
SOLE IMPORTER & DISTRIBUTOR
P. O. Box 201, MOHARRASA, MOROCCO



写真3 アフリカン・プリントの見本布3(ケニア、モンバサ:2000年)



写真5 ジャワ更紗のガルダの翼模様をデザイン・ソースとしたアフリカン・プリント(ガーナ、アクラ:2005年)

写真10 アフリカン・プリントの衣装をまとった男性（マリ、アクラ／2005年）



写真8 アフリカン・プリントのドレスをまとった女性（カメルーン、ドウアラ／2005年）



写真6 ジャワ更紗の頭巾にあらわされた模様をデザイン・ソースとしたアフリカン・プリント（ナイジェリア、ラゴス；2005年）

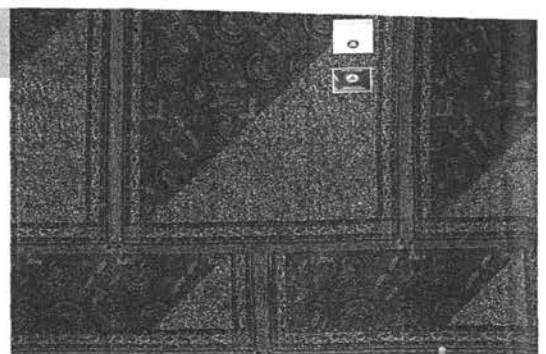


写真11 アフリカン・プリントの衣装をまとった男性（マリ、バマコ郊外；2005年）



写真9 アフリカン・プリントの店頭に立つ女性（マリ、バマコ；2005年）



写真7 アフリカン・プリントの衣装をまとった少女たち（マリ、バマコ；2005年）

続ジャワ更紗研究

ジャワ更紗をデザイン・ソースとしているという目を当たり前にしたためである。アフリカン・プリントは木綿の布にスクリーン・プリントによって模様をあらわした捺染布で、それらは西アフリカから東アフリカにかけての地域、いわゆる熱帯アフリカにおける現代ファッションとしてひろく普及している。そうしたアフリカン・プリントは、18世紀後半にイギリスから始まった産業革命のなかで出現した比較的あたらしいファッショ素材であり、ヨーロッパで生産された初期のアフリカン・プリントのデザインにジャワ更紗のデザインの影響があったということは、少なからず承知していた。しかし、その影響が現代のアフリカン・プリントにおいても引き継がれているという事実は、またしても青天の霹靂としかいえないような驚きであった。

二〇〇〇年にアフリカン・プリントと出会ったことをきっかけとしてはじまったわたしのあらたな研究は、いわばこれまでにおこなってきたジャワ更紗研究の続編といえるものであり、その後には織機や機織り技術の調査研究と併行して、アフリカン・プリントをはじめとするプリント・テキスタイルの調査研究をおこなってきた。そうしたなかで、二〇〇二年から二〇〇三年にかけては、民博の地域研究企画交流センターが主催するプロジェクトとしておこなわれた連携・共同研究「アジア染織業における地域のアイデンティティと国際ネットワーク」に参加し、二〇〇二年秋に東京大学で開催された研究会では、さきのジャワ更紗をデザイン・ソースとしたアフリカン・プリントをはじめとする調査資料を

もとに、「更紗と緋と縞の国際ネットワーク」というテーマで研究発表をおこなった。さらに、二〇〇三年六月に、オーストラリアのキャンベラにあるオーストラリア・ナショナル・ギャラリーで開催されたシンポジウム「Sari to Sarong 500 years of Indian and Indonesian textile exchange」で「Textile Globalization of Batik Foreign Influences to the Batik & Batik Influence to the World」(「バティック(ジャワ更紗)のグローバルゼーション・バティックへの海外からの影響と世界へのバティックの影響」というテーマで研究発表をおこなった。

これらの研究発表と前後しておこなってきた調査研究では、次々とあらたな事実があきらかになっていく。たとえば、アフリカン・プリントと同様に、ジャワ更紗のデザインが近代以降にヨーロッパやインドや日本で製作されたプリント布のデザインに取り込まれ、それがインドネシアに逆輸入されてきたことについては、これまでに一九九六年に出版した『ジャワ更紗』においても指摘してきた。しかし、いろいろ調べてみると、そうしたプリント布の生産は、アフリカン・プリントの生産と深くかかわっており、それらのインドネシア向けのプリント布やアフリカン・プリントは、イギリスやオランダをはじめとするヨーロッパ諸国につづいて、19世紀からはインド、そして20世紀前半からは日本でも生産されるようになってきたという事実がうかがいあがってきた。また、20世紀後半からは、アフリカ諸国、インドネシア、タイ、中国などでも、アフリカン・プリントが生産されるようになっており、インドネシアで生産されたジャワ更紗をデザイン・ソースとしたプリン



写真16 ローラー・プリントによるアフリカン・プリントの
捺染工程（カメルーン、ドゥアラ：2005年）

写真14 アフリカン・プリント
の衣装をまとった女性（セネガ
ル、ダカール／2005年）



写真12 アフリカン・プリント
の衣装をまとった男性（マリ、
バマコ／2005年）

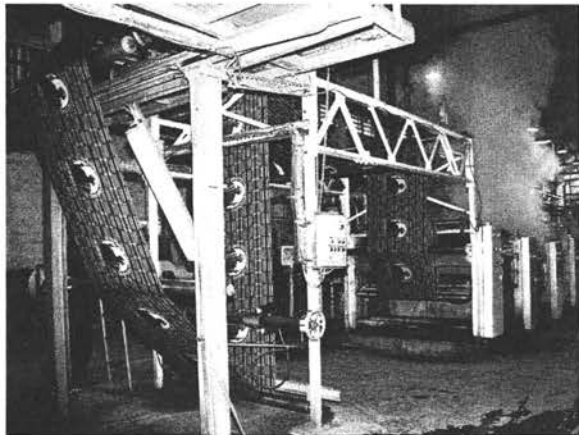


写真17 アフリカン・プリントの仕上げ工程（カメルーン、ドゥアラ：2005年）



写真15 アフリカン・プリントの
衣装をまとった女性（セネガル、
ダカール：2005年）



写真13 アフリカン・プリントの衣装をまと
った男性（ニジェール、ニアメ：2005年）

展覧会開催に向けて

ウ置き道具を使用したジャワ更紗のロウケツ染め技術は、20世紀後半にオーストラリアのアボリジニの人々のあいだに導入され、かれらの工芸や芸術として展開しているし、同様のチャンティンを使用したロウケツ染め技術はわが国のキモノの製作技術のうちにも取り込まれている。また、カリブ海諸国においてもロウケツ染め製品の製作技術のうちに取り込まれている。

アフリカン・プリントとの出会いに始まった続ジャワ更紗研究の進展にともない、わたしは近い将来、その研究の成果を一九九三年に開催したジャワ更紗の展覧会の続編として、

ト布は、インドネシアにおいて、伝統的なジャワ更紗を凌駕するファッション素材として急成長するとともに、その一部は東南アジア大陸部やその他の地域の国々にも輸出されるようになってきている。

以上に述べてきたことは、ジャワ更紗のデザインのプロババル化として捉えられることがらである。しかし、ジャワ更紗に見いだされるグローババル化現象は、これまでに述べてきたようなデザインにとどまるものではなく、ロウケツ染めの技術においても歴然としていいる。すなわち、銅製の細かい口金をともなったチャンティンと呼ばれる独特のロウ

民博の特別展で多くの方々を紹介したいと思うようになっていた。当初、その展覧会の開催は二〇〇八年頃を予定していたが、来年の秋に予定されていた別の展覧会が昨年末の段階で取り止めとなったことから、急遽、わたしの企画が前倒しで取り上げられることとなった。

ただし、突然の展覧会企画の前倒しをわたしが受け入れたのは、これまでに述べてきたようなジャワ更紗を基軸としたデザインと技術のグローババル化という展覧会の趣旨のうちに盛り込まれている地域や個別のテーマを研究してきた民博の内部や外部の研究スタッフの存在があったことによるもので、そうした方々の参加を得て、この秋からは民博であらたな共同研究会も立ち上げている。

この夏以降にわたしが世界中を飛び回っているのも、ジャワ更紗のデザインや技術のグローババル化と関わる地域の現況を把握し、展覧会の開催に向けて不足している資料や情報を入手するという総括責任者としてのつとめを果たすための活動である。そして、共同研究会の研究分担者として参加していただいているメンバーもまた、それぞれの分担する地域やテーマについての調査研究を鋭意おこなっていただいている。

（国立民族学博物館民族文化研究部 教授／よしもと・しのぶ）

文献
吉本 忍

1993年『ジャワ更紗―その多様な伝統の世界―』（展覧会カタログ）、平凡社

『現代のジャワ更紗―ニュー・ファッションへの展開』（展覧会カタログ）、N

HKサーピスセンター
1996年『ジャワ更紗』、平凡社